

徴税人ザアカイ

ルカ 19 章 1-10 節

19:1 イエスはエリコに入り、町を通過しておられた。

19:2 そこにザアカイという人がいた。この人は徴税人の頭で、金持ちであった。

19:3 イエスがどんな人か見ようとしたが、背が低かったので、群衆に遮られて見る事ができなかった。

19:4 それで、イエスを見るために、走って先回りし、いちじく桑の木に登った。そこを通り過ぎようとしておられたからである。

19:5 イエスはその場所に来ると、上を見上げて言われた。「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。」

19:6 ザアカイは急いで降りて来て、喜んでイエスを迎えた。

19:7 これを見た人たちは皆つぶやいた。「あの人は罪深い男のところに行って宿をとった。」

19:8 しかし、ザアカイは立ち上がって、主に言った。「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します。」

19:9 イエスは言われた。「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。」

19:10 人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。」

<ザアカイという人>

徴税人はユダヤ社会の中で冷たい目で見られ、陰口を言われ、軽蔑されてきました。きょう登場するザアカイはその徴税人の頭目（とうもく）です。祭司長、会堂責任者などがユダヤ教の善玉のボスだとすると、きょうの主人公ザアカイはさしずめユダヤ教の悪玉のボスです。

この人は徴税人の頭で、金持ちであった。（19:2）

徴税人というだけでなく、そのうえ彼は金持ちでした。かつてイエスはこう言いました。

金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通る方がもっと易しい (ルカ 18:25)

なんとも、もはや罪びとであり金持ちのザアカイは救いの道が残っていないようです。

<イエスに出会う>

そんな彼の住むエリコという町にイエスがやってきた時、ザアカイは木に登ってイエスを見ようとした、それは背が低いからだと説明されます。このことはザアカイの肉体的欠点を強調しているだけでしょうか。それともザアカイの人格が低い、乏しいことをも象徴しているのでしょうか。

私たちは、人それぞれ怒りっぽいとか、嫉妬心が強いとか、金にだらしないなどなど、多くの欠点があります。そのうえ経済的なもの、生まれつきものの、置かれた立場による違い、環境など、自分にはどうしようもできない障害もあります。

嫌われ者の徴税人にユダヤ人の中で望んでなる人はいるのでしょうか。儲かるからやるという人もいたでしょう、でも、どうにもならない事情があって泣く泣く仕事についた人もいることでしょう。

<徴税人>

理屈をいえば、徴税人とは微妙な立場です。

当時のローマは軍事力を誇り、領土を拡大し絶頂期を迎えていました。領土拡大政策にはさまざまな目的があるのですが、占領下にある国からの税収は経済的に重要です。その古代ローマには、属州の徴税や公共事業を国にかわっておこなう「徴税請負人」という制度がありました。微妙というのは徴税請負人になると、実際の額より多くの税額を徴収して、差額を着服することができ、私腹を肥やせたという点です。徴税請負人は主に新興貴族にあたる騎士階級の有力者が任命され、プブリカヌスと呼ばれます。彼らはとうぜんローマ人、ローマ市民です。

この徴税請負人（プブリカヌス）は収税を下請けに任せます。つまり実際の仕事は自分達ローマ人がやるのではなく、汚れ仕事は占領民ユダヤ人に請け負わせていました。このやり方は支配者の常道ですが、ユダヤ人にとっては屈辱的な仕打ちです。

さて我らの徴税人の頭ザアカイですが、この徴税請負人（プブリカヌス）の下請け、孫請け、ひ孫請け、…どのランクにいたのかわかりませんが、頭とあるのですから、けっこう上位のほう、ザアカイの下にまだ請負人はいたはずです。

おおげさな言い方をすれば、徴税人の頭ザアカイは「政治と宗教」の狭間で苦しむことになった人ともいえます。

かつて軍事的、政治的に成功したイスラエルはいまはみじめな属州となっています。一方その軍事的敗北、政治的失敗を糧にしてユダヤ教をずば抜けて優れた宗教に育んだのもイスラエルです。このいわば宗教に偏ったユダヤ社会のなかで非難されている徴税人の苦悩はいかばかりのものだったでしょう。でも、これもしょせんきれい事で、実際のところは金持ちだから気に食わない、親分風吹かしているから生意気だ、おれの金をむしりにとってピンはねした、チビのくせに…。宗教的によろしくないという非難の仮面の下にどんな気持ちが渦巻いていたのかはわかりません。でも人間はみな罪びとであるならば、私たち自身が胸に手をあてて自らを振り返れば理解できないことはありません。

<イエスの救い>

「あなたたちの中で罪を犯したことのない者が、まず、この女に石を投げなさい」（ヨハネ 8:7）

イエスはこの一言で姦通の女を石打ちの刑から救い出しました。

「今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい」（19:5）

イエスは木の上にいるザアカイを見上げて、このように言います。ザアカイ

はこの一言ですべて癒されます。

私たちの様々な欠点や障害は、イエスによって解放されます。この解放は見た目やまわりの状況の変化ばかりでなく、イエスと出合った人のところの中に生まれる喜び、神との関係の回復です。

金持ちの議員は自らイエスに会いに来たけれど、すれ違いのまま出会いは終わってしまいました。ザアカイは招きに応じてすぐに反応し、癒され、救われました。ザアカイが施しをしたところで、世界が変わるわけではありません。ザアカイの回心が徴税人をやめるという決心となっても、誰かほかの者が徴税人の頭になり、ローマの支配が続く限り（注1）あこぎな取立てはおこなわれるでしょう。

しかし、イエスは現実の敗北の中に未来の勝利を透視します。

「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから」

(19:9)

私たち一人ひとりもアブラハムの子、神の子どもです。神から愛情を注がれ、大切に育てられている一人です。

「今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい」

イエスはザアカイだけでなく私たちにも同じように呼びかけています。わたしたち一人ひとりがこのみことばを心に刻み、イエスを迎えることができますように。

(短い祈り) 自由に用いる

全能の神よ、きょう聞いたみことばを心に深く植え込み、み恵みによって行いの実を結び、み名の栄光をあらわすことができますように。わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン

注1：紀元前27年、アウグストゥスは初代ローマ皇帝となり弊害が多く腐敗を産み出した税制度を改革に着手します。それまで上限のなかった税率に歯止めをかけようと、民間

の徴税請負人への委託を止め、属州地域を含めて役人を派遣して直接徴税する人頭税を導入し、農民に対する穀物税も 10%以下に設定するなど、不当な税率を引下げました。

そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。これは、キリニウスがシリア州の総督であったときに行われた最初の住民登録である。人々は皆、登録するためにおのおの自分の町へ旅立った。ルカ 2:1-3

ルカ 2 章はイエスがベツレヘムで生まれる経緯の記事になっています。引用部分の「登録」とはアウグストゥスの人頭税導入に伴う登録と解釈されています。このアウグストゥスの改革が実行されているとすれば、このザアカイの記事は歴史と矛盾した内容（徴税は直接徴税に改革された、徴税人の出番はない）になりますが、教科書の歴史と現実とは食違っていることも多々あるでしょう。